



## 「環境年表 平成25・26年 (理科年表シリーズ)」

国立天文台編

丸善出版, 2013年12月

454頁, 2000円 (本体価格)

ISBN 978-4-621-08737-4

本書は「環境」についてのデータ集である。2009年に第1冊が、2011年に第2冊が出て、今回が3冊目である（以前にオーム社から同じ名前の本が出ていたが、それとは別である）。

環境問題に対する世の関心は高いが、正確な知識を身につけるのはなかなか難しい。地球温暖化に対しても、不正確な情報や一方的な主張を目にすることがある。この状況の下、気象学会による地球温暖化についての解説書が近く出版される運びになっている。しかし、こうした解説書と並んで大事なものは、信頼できるデータであろう。実際、地球温暖化についての誤解の一部は、定量的な確認をきちんとやれば解消できるものである。本書には、その基になるようなデータが満載されている。章立ては以下の通りである（カッコは評者による補足）。

- 1 地球環境変動の外部要因（太陽活動，宇宙線，軌道要素変動，天体の地球衝突など）
  - 2 気候変動・地球温暖化
  - 3 オゾン層
  - 4 大気汚染
  - 5 水循環
  - 6 陸水・海洋環境（水域生物・生態系を含む）
  - 7 陸域環境（地殻変動，陸域生物・生態系，農・畜産などを含む）
  - 8 物質循環
  - 9 産業・生活環境（エネルギー，化学物質，騒音・振動，廃棄物などを含む）
  - 10 環境保全に関する国際条約・国際会議
- 今回から新しく加わった点として，海洋の気候変動

（第2章），地下水の循環（第5章），エネルギーの節（第9章）があり，生物関連の章は大幅に改訂されたという。また，附録として東日本大震災や放射能に関連するデータがいくつか載っている。

各章に目を通していくと，「環境」に関する問題の中にはこんなものもあったのか，と気づかされる資料が少なくない。また，テーマ自体は聞いたことがあるものでも，データの内容には新しい発見がある。例えば第2章には，過去数十年間にわたる日本の黄砂観測回数の経年変化が載っている。最近では黄砂の飛来が増えてきたとして社会の関心が高まっているが，掲載されているグラフを見ると黄砂観測回数には年々の変動が大きく，近年でも観測回数の少ない年がある一方で，1970年代にも近年の平均を上回る年があったことが分かる。また，第4章に出ている世界各都市の大気汚染濃度の表によれば，中国を含む世界の多くの都市で，2010年のPM10濃度は1990年に比べて下がっている。このように，それぞれの図表を読み込んでいくことにより，環境問題について一時のセンセーショナルリズムに流されない確かな知見を得ることが期待できる。

もっとも，去年あたりから大きな関心を呼んでいるPM2.5や，被害の増加が著しい熱中症についてのデータは見当たらない。このように，ある特定の事項を調べたいとき，ほしいデータがピンポイントで見つかるとは限らないかも知れない。また，データは時間が経てば陳腐化するので，本書の内容も早晚古くなるだろう。しかし本書の魅力は，環境問題の全体像を見渡しながら，多種多様な資料を通覧していけるという点にある（これはネットでは難しい）。その中に興味あるデータを見つけたら，ネット等でその最新情報や類似情報を探すという使い方も考えられる（この観点からすると，データの出所がもう少し詳しく書かれていれば親切だったと思う）。これで2000円（+税）というのは，手ごろな買い物と言えるだろう。

（気象研究所 藤部文昭）